



畫本西遊全傳

編
四



遠
2500
40-24



門へ遠く
號 2500
巻 40-24

皇朝戰略編

筆張園陵宮田先生著

全部十五卷

前帙八冊
後帙七冊

此書者遠く天慶始平將門ノ亂ヲ東國ニ作レシ始道々寛永ノ末島原ノ賊徒ノ西海ニ殊滅セラレシニ至迄前後凡七首有余年ノ間名將良主英雄豪傑ノ奇戰妙畧ノ跡ノ法則トナルヘキヲ數多ノ史乘ヨリ撰ヒ出シ武學ノ用ニ備ヘタル者ニシテ實ニ兵家ノ龜鑑タルト云ヘシ名將ノ勝ヲ製スル術ノ覺リ又國家興廢ノ由ル所以テ知ルヘキ者ハ此書ニ如ク無レト云

大阪書肆 心齋橋通北久堂寺町 河内屋源七郎 梓

繪本西遊記三編卷之四

前章の下

岳亭丘山譯



池

此物音おと小驚おどろき常つね小空こくら中ちゆう小在せう唐僧たうそうを守護しゆごする處ところの諸神しよじん金剛こんごう揭諦けつじ六甲りくが六丁りくてい十八位じゅうはちゐの護法ごほふ伽藍がらんまゝまて牛魔王ぎゆうまおうを取圍とりかこむ牛魔王ぎゆうまおう不當ふたうとや思おもひひ再また度たび真まことの本相ほんさうを顯あらわし翠雲山すいうんざん小逃こにげ歸かへり芭蕉洞ばしやうどう小入こいり門かどを堅かたく關かぎて敢あやて出でるままま此時このとき列位れつゐの天神てんじん行者ぎやうじやと俱ともに追お追おままア翠雲山すいうんざんを取圍とりかこむ洞どうの中ちゆう小攻せうこう入いんと為なる處ところ小下こしたち又また一ひと群ぐん来きる者ものア是こゝ八はち戒かいと土地ちち神かみ們ら陰兵いんぺいと扯ひ領りやう此處こゝ小押おし寄よ到いたる行者ぎやうじや曰いくはんん洞どうの光景くわうけい怎いか麼なや八はち戒かい各おのて曰いくはんん吾われ彼か小妖こよう的てきを伐き尽つくく玉面公ぎよくん主しゆを殺ころし見みしを面おもて白しろき孤ひとりらら火ひを放はなて洞どう中ちゆうを盡つく般ぱん燒や捨する此死このし小ゆ又また牛魔王ぎゆうまおうが巢穴すうけつありと聞きつるゆゑ是こゝを尚なほ打破た破はり捨すんと思おも

土地神と諸俱あつちのしんふ故意あつちのしん々々爰あつちのしんをあつちのしんまあつちのしんりあつちのしん行者あつちのしん曰あつちのしんく此あつちのしん如あつちのしん羅刹あつちのしん女あつちのしんがあつちのしん巢穴あつちのしんゆあつちのしんしてあつちのしん芭蕉洞あつちのしんと云あつちのしんるあつちのしん牛魔王あつちのしん今あつちのしん此あつちのしん裡あつちのしんにあつちのしん逃あつちのしん入あつちのしんりあつちのしん吾あつちのしん們あつちのしん

千あつちのしんのあつちのしん伐あつちのしん入あつちのしんんと云あつちのしんをあつちのしん八あつちのしん戒あつちのしんもあつちのしん心あつちのしん得あつちのしんりあつちのしんとあつちのしん兩あつちのしん個あつちのしん一あつちのしん齋あつちのしんふあつちのしん鉄あつちのしん棒あつちのしん釘あつちのしん釘あつちのしんをあつちのしん擧あつちのしん

展あつちのしんてあつちのしん洞あつちのしん門あつちのしんをあつちのしん打あつちのしん破あつちのしんるあつちのしん牛魔王あつちのしんハあつちのしん羅刹女あつちのしんふあつちのしん逢あつちのしんてあつちのしん行者あつちのしんとあつちのしん戦あつちのしんひあつちのしんのあつちのしん光あつちのしん景あつちのしんをあつちのしん説あつちのしん

語あつちのしん居あつちのしんるあつちのしん處あつちのしんふあつちのしん行者あつちのしん八あつちのしん戒あつちのしん亦あつちのしん門あつちのしんをあつちのしん打あつちのしん破あつちのしんしあつちのしんとあつちのしん聞あつちのしんてあつちのしん大あつちのしんいあつちのしんふあつちのしん怒あつちのしんりあつちのしん宝あつちのしん貝あつちのしんもあつちのしん口あつちのしん

より出あつちのしんしあつちのしん羅刹女あつちのしん付あつちのしん与あつちのしん二あつちのしん口あつちのしんのあつちのしん劍あつちのしんをあつちのしん扯あつちのしん提あつちのしん門あつちのしん外あつちのしんにあつちのしん跳あつちのしんりあつちのしん出あつちのしん再あつちのしん度あつちのしん行あつちのしん者あつちのしんと

八あつちのしん戒あつちのしんをあつちのしん相あつちのしん敵あつちのしんふあつちのしん做あつちのしん五あつちのしん十あつちのしん余あつちのしん合あつちのしんぞあつちのしん戦あつちのしんひあつちのしんるあつちのしん列あつちのしん位あつちのしんのあつちのしん神あつちのしん兵あつちのしん們あつちのしん牛魔王あつちのしんとあつちのしん取あつちのしん圍あつちのしん

之あつちのしん衛あつちのしん々あつちのしんふあつちのしん攻あつちのしん寄あつちのしんるあつちのしん牛魔王あつちのしん四あつちのしん面あつちのしん八あつちのしん方あつちのしん都あつちのしんてあつちのしん敵あつちのしん中あつちのしんにあつちのしん道あつちのしんへあつちのしんきあつちのしん道あつちのしん無あつちのしんをあつちのしん怕あつちのしん

此あつちのしん雲あつちのしんふあつちのしん乘あつちのしんてあつちのしん天あつちのしんふあつちのしん昇あつちのしんるあつちのしん爰あつちのしんふあつちのしん又あつちのしん托あつちのしん塔あつちのしん天あつちのしん王あつちのしん哪あつちのしん叱あつちのしん太あつちのしん子あつちのしん照あつちのしん應あつちのしん鏡あつちのしんをあつちのしん把あつちのしんてあつちのしん空あつちのしん

中あつちのしんふあつちのしん立あつちのしん牛魔王あつちのしん靜あつちのしんふあつちのしんまあつちのしんまあつちのしんとあつちのしん我あつちのしん們あつちのしん如あつちのしん來あつちのしんのあつちのしん仏あつちのしん勅あつちのしんをあつちのしん受あつちのしんてあつちのしん爰あつちのしんふあつちのしんまあつちのしんてあつちのしん你あつちのしんをあつちのしん待あつちのしん

更あつちのしん久あつちのしんしあつちのしん牛魔王あつちのしん照あつちのしん應あつちのしん鏡あつちのしんをあつちのしん照あつちのしんさあつちのしんれあつちのしんてあつちのしん又あつちのしん忽あつちのしんちあつちのしん大あつちのしん白あつちのしん牛あつちのしんとあつちのしん成あつちのしんてあつちのしん角あつちのしんをあつちのしん將あつちのしんて

尖あつちのしん的あつちのしんかあつちのしんらあつちのしん本あつちのしん天あつちのしん王あつちのしん劍あつちのしんをあつちのしん振あつちのしんてあつちのしん少あつちのしん時あつちのしん戦あつちのしんひあつちのしん居あつちのしんるあつちのしん處あつちのしんふあつちのしん行者あつちのしん八あつちのしん戒あつちのしん雲あつちのしんをあつちのしん分あつちのしん

てあつちのしん趕あつちのしん及あつちのしん到あつちのしんるあつちのしん哪あつちのしん叱あつちのしん太あつちのしん子あつちのしん兩あつちのしん個あつちのしんふあつちのしん向あつちのしんひあつちのしん吾あつちのしん們あつちのしんまあつちのしんてあつちのしん大あつちのしん聖あつちのしん小あつちのしんをあつちのしん援あつちのしんてあつちのしん牛魔王あつちのしん

王あつちのしんをあつちのしん退あつちのしん治あつちのしんをあつちのしん當あつちのしん今あつちのしん其あつちのしん功あつちのしんをあつちのしん見あつちのしんべあつちのしんと云あつちのしんよりあつちのしん疾あつちのしんくあつちのしん彼あつちのしん白あつちのしん牛あつちのしんのあつちのしん背あつちのしんふあつちのしん閃あつちのしん

々とあつちのしん飛あつちのしん乘あつちのしん火あつちのしん輪あつちのしん兒あつちのしんをあつちのしん把あつちのしんてあつちのしん牛魔王あつちのしんがあつちのしん角あつちのしんのあつちのしん上あつちのしんふあつちのしん打あつちのしん黄あつちのしん口あつちのしんよりあつちのしん真あつちのしん火あつちのしんをあつちのしん

噴あつちのしん下あつちのしんのあつちのしん人あつちのしんをあつちのしん忽あつちのしんちあつちのしん火あつちのしん焰あつちのしん燃あつちのしん々あつちのしんとあつちのしん燃あつちのしん昇あつちのしんりあつちのしん牛魔王あつちのしんがあつちのしん身あつちのしんをあつちのしん燒あつちのしん々あつちのしんれあつちのしんをあつちのしん牛魔王あつちのしん

鹿あつちのしん王あつちのしん苦あつちのしん困あつちのしん呻あつちのしんびあつちのしん頭あつちのしんをあつちのしん振あつちのしん尾あつちのしんをあつちのしん揺あつちのしんりあつちのしん又あつちのしん變あつちのしん化あつちのしんしあつちのしんてあつちのしん身あつちのしんをあつちのしん遁あつちのしんんあつちのしんとあつちのしん狂あつちのしん々あつちのしんれあつちのしんと

牛魔王あつちのしんのあつちのしん照あつちのしん應あつちのしん鏡あつちのしんをあつちのしん照あつちのしんさあつちのしんせあつちのしんてあつちのしん再あつちのしん度あつちのしん變あつちのしんるあつちのしん竟あつちのしん能あつちのしんはあつちのしん今あつちのしんのあつちのしん遁あつちのしんるあつちのしん計あつちのしん

策あつちのしん尽あつちのしんてあつちのしん天あつちのしん王あつちのしん我あつちのしん一あつちのしん命あつちのしんをあつちのしん助あつちのしんるあつちのしん我あつちのしん仏あつちのしん道あつちのしん歸あつちのしん依あつちのしんをあつちのしんとあつちのしん叫あつちのしんびあつちのしん々あつちのしんれあつちのしんとあつちのしん哪あつちのしん叱あつちのしん

太子あつちのしん曰あつちのしんくあつちのしん你あつちのしん命あつちのしん惜あつちのしんばあつちのしん快あつちのしんくあつちのしん芭蕉扇あつちのしんをあつちのしん施あつちのしん與あつちのしんべあつちのしん牛魔王あつちのしん曰あつちのしんくあつちのしん芭蕉扇あつちのしん

我あつちのしん渾あつちのしん家あつちのしん羅あつちのしん刹あつちのしん女あつちのしんふあつちのしん預あつちのしん置あつちのしんるあつちのしん哪あつちのしん叱あつちのしん太あつちのしん子あつちのしん是あつちのしんをあつちのしん聞あつちのしんてあつちのしん急あつちのしんぎあつちのしん傳あつちのしん教あつちのしん索あつちのしんをあつちのしん以あつちのしんて

牛魔王あつちのしんがあつちのしん鼻あつちのしん穴あつちのしんハあつちのしん串あつちのしん住あつちのしんしあつちのしん悟あつちのしん空あつちのしん們あつちのしんとあつちのしん諸あつちのしん俱あつちのしんふあつちのしん翠あつちのしん雲あつちのしん山あつちのしんにあつちのしん到あつちのしんりあつちのしん芭蕉洞あつちのしん

三藏沙僧
神兵并



三藏沙僧

小推寄る牛鹿王言を發て夫人趕く扇を持まゝと我命を助と
 呼つてを羅刹女の驚き多ふ扇を把て門外へ越り出頭を地
 小當て并依り天神吾們夫婦を罪を免恕多人當今扇を孫叔小借
 て其功を助べとて甚難扇を指出けしを行者惟信受收り列
 位の神兵兵と諸俱小三藏の居るの死へ急ぎ行却説三藏と悟淨
 を行者が音信を待居死小者々祥雲虚空小滿渡り瑞光忽ち滿
 地を爰に三藏是を見て怕と戦ひ悟淨依彼を見よ那里より許
 爰の神兵来るる悟淨是を能認得て師父怕とるを爰と是
 を如來の勅ふよりて常小師父を守護するの四大金剛金頭揭
 諦六甲六丁護法伽藍牛を牽く哪叱太子鏡を把り北塔天王
 李天王六師兄の扇を持二師兄の土地神と後小遣ひ其餘の都て護衛の神

兵より三藏向も敢て昆盧帽子を頂き金綱の袈裟を帶地上小
 拜を此時諸神降り四大金剛三藏小向ひ曰く我佛勅を受奉
 り汝ら難を救ふより休力を尽して大願を成就せよ管は心慢受る
 り也三藏頭を地小著て身子何の徳有て尊聖の降臨を惠め
 る夏太も畏く侍ひぬと幾度も拜謝する斯て行者の甚難扇を把
 て火焰山小近着力と極て一度扇を平々として火焰と二度扇
 を蕭々として清風を發し二度扇を黒雲四方小起つと罪々として
 細雨を降し三藏炎熱の気を去心は頓ち心清々なり此時四大金
 剛北塔天王父子其外諸位の神兵三藏小別と牛鹿王を牽きて
 天上小還る小土地神の羅刹女を引居て一違小同ハムされの羅刹女
 拜依りて曰く大聖功終ての上の扇を我小給りて身を治め性と養

せむ人行者曰く我聞此山火浴ると雖も五穀殖る後又火焰登ると
 とうや今怎麼せを火の根を除き此処の生靈をくく安んず性命を
 養ふやんや羅刹女曰く火根を除くと欲ば列て四十九扇搦時
 も永世火登る更有べくは是を聞て行者扇を把て列て搦こと
 四十九扇乍ち涼々として大雨降り終ふ火根消滅して永々火焰
 登る事なく地方の生靈安穩なる事を得たり行者扇を羅刹女小
 返を羅刹女の拜謝して伺ふ帰り静ふ身を修行して後竟も正果
 を得たりとうや斯て行者が黨們三個の三藏を馬に乗進せ土地神
 小札を施し別れを告身身体涼々として且下滋潤するを此坂
 の煩も無く終ふ八百里の火焰山を越高西方小向ひて急ぐる
 瀟垢洗心唯掃塔 縛鹿歸正乃終身

去程小三藏師徒の火焰山を越て猶西方小急ぎめ人ハ早秋も暮冬
 の首小推扱て急ぎ一座の城地有死小到る三藏の曰く且今言は三国
 の三城を人吾們城小入て関文を換べるとて馬を前めて行ゆ
 六街三市宝を列ね賤を積人の衣冠を正うして光景感と爽々
 して交ふ十餘人の和尚有て家々の門小立往を荒斎をよこ三藏此
 和尚們を見小怪むべ都て皆首枷手鎖をへり三藏嘆息して
 曰く免死する時ハ独悲しむと云り歎き尚其類を思ふ我の同
 じ汝門の身小て怎生彼を見て悲まざるんやと行者小命とて其
 語を向くもの悟空彼和尚們小向ひ你們何方の沙門ふて又何
 木の罪有て斯く首枷を蒙りらるや彼和尚們跪下て曰く此
 処小金光寺と号き寺あり吾們ハ其寺小居住する處の沙門小て

候か今屈究の難ふ偶て斯のごく苦候の行者又其仔細を訊
 沙和尚們が曰く此如の談話を聞き忍ふありて列位五老山
 小妻の一人一箇小一夜の御宿を勅べ二箇小の我々が困苦を
 も談話侍らん三藏師徒是小遵ひ和尚們と打連て山門小到り
 の人を門小一箇の額あり勅建護国金光寺と云る七箇の金字を
 鐫付し二藏門を正殿小到り佛を拜し方丈小入ぬ人の柱の
 下小六七箇の和尚を縛りて首枷手鎖を安置し二藏深く疑
 ひ怪と旦悲と不堪と嘆息して居るの如小衆部の沙門三藏の
 小并依して曰く尊師徒小向奉る事あり列位の尊相貌此國の人
 小非は倘や東土大唐より来りし聖僧小の御座とや二藏の
 曰く儲の你小徳廣大なりて先知の法あり能吾們が本國を悟り

知るるや衆僧の曰く我々先知の法なりと雖も屈究の罪を受けてより以
 来是を清むべきの方便なく只管天地小歎き訴へ祈りて作夜不
 思議の夢を見し那里よりとも知れ色有て東土大唐の聖僧を頼
 你小が屈究を分明得て性命恙なかるべと告る者あり今朝夢覚て
 個々此支を語り合樂く思ひ何日唐朝の聖僧小逢ふ事有
 んと増々心小祈る時節今老師父来りて吾們が身を仔細小向
 小昨夜の夢と符合せり此故小唐朝の聖僧と悟候か三藏曰く則
 ち我々東土大唐より西天小到りて佛を拜し経を求るを并三藏と云
 沙和尚の抑此國の怎麼する死すて你何の故小究屈を蒙りし
 や備細小説話さし衆部の僧并依りて告るる此國の祭賽國
 と号て西天へ行大路あり我金光寺の原来一箇の金塔あり國王の

先祖一箇の宝貝の仏舍利を塔の頂小納めり此故小金塔の頂上
より祥雲常小霞驟瑞靄高く升る夜を金光を放ちて十方を照
し昏ハ彩霞を噴て遠近是を仰ぎらるる于茲於て四方の諸國より
此國と天府神京と唱て個々貢物を捧げ臣と稱し其故小
繁昌年々小増し行處小思をさりた三年以前八月朔日の夜天よ
り血と降り彼黄金宝塔を汚し夫より後曾て祥雲瑞靄垂る更なる
外國是を見て國政衰へると云く朝貢を捧げ末朝する者もる
列位の大匠是を見て此寺の汝門塔中の宝貝を盗み外國へ賣渡し
つる故斯の若く祥雲垂るつると奏向に國土の昏君小しと更小理
非とも辨ぬれば忽ち吾們を召捉ぬひ百般と拷問し或を鞭打攻可
責宝貝の有死を訊ぬると雖も我們更不知ぬ更なるを自首せしむべき

謂せり故小帝王怒り多ひ斯のどく首枷をいらし手鎖を蒙りて
苦む更三年小及び死者過半なり万望の聖僧廣く慈悲を誦法
力を施して我們が性命を救ひぬる三藏問て然様の暗の如くなる
更ハ吾も又怎麼とも做難し然と雖も我長安を出し時一箇の誓言を
發し寺小偶を仏を拜し塔小遇を是を掃んと言つる今日此知小未
し屈究の僧小逢原是宝塔より發つる更なるを我今沐浴して
新なる帝を求め塔小登りて是を掃ひ備方便のふる更なるを國
王小奏して你們が冤屈を明め関文を換て西天小赴くべし衆部の
僧大の小喜怡拜依して夫より茶飯などを獻せて三藏師徒を救
待たり既小天晚小及び夕暮を二藏急小沐浴して新なる帝を把短
き衣を着て準備ありて行者師父を止止り彼塔上血を降して汚せ



悟空
空
夜
塔上
妖怪捉



多不古...
...
...

きつん 何ぞ怪氣みからんや老孫師父と俱ふ行はなほ三藏大い
喜び行者と打連く塔を倒れ糸を把て一層一層ふ是を掃ひ第七
層ふ到る時既ふ二更の頃ふ及び三藏身体大いふ勞せ行者ふ向ひ
く向くるを此宝塔高さ何程あるや行者が曰く十二層の高さあ
る三藏の曰く長安を出しより以來未だ斯る数層の宝塔を見はれ
今身心勞せぬと雖も勅て是を掃ひ竟る本願を果はべしと又二層
を掃ひひ終ふ十層ふ到りて伏倒れ腰痠股痺を進退極りて動く
竟能は悟空を呼んで曰く你今より我ふ代りて残る二層を掃ひ
行者命を受けて糸を請取暫時ふ二層を掃ひ終り十三層
ふ到るを爰ふ何個う在て談話の事を行者怪く思ひ斯る塔の頂
上ふ人の登るべき謂はるゝ必定妖怪の死為るんと終ふ糸を捨て

塔の窓より潜り出て雲を踏で伺ひ見ふ第十層の塔中ふ二個の妖
怪對座して奉と打酒喫居る行者鉄棒を把て塔門を遮り大いふ
叱て曰く你奈何なる妖怪を此塔中の寶貝を奪ひ去るや彼妖怪
是を聞て慌忙驚き駈出んとする處を行者塔門ふまて取て逃さ
ば飛入りて捉んとすを妖怪の塔の壁ふ扯着て動だ得ば只管叫ん
で曰く吾命を助けぬ我れが知る度ふ非はと云行者件一
摺り第十層を扯下り三藏の前ふ引居師父彼と寶貝を偷り
る妖怪を捉へしことと呼びてを三藏此時座睡して居るひく此
きふ眼を開きて曰く你何処より捉へきことぞ行者曰く我師父
ふ代りて塔を掃ひ十三層ふ到る處ふ此妖怪奉と打酒を食ひ居る
故則ち捉まりしより三藏喜んで妖怪ふ向ひ你の那里より来

妖怪ふて宝貝を盗み何死へ隠し置つるど具小自首いふはべ
 妖怪ども戦々兢々我々の乱石山碧波潭の方聖竜王が遣まると如の
 塔を護るの官人なり一個の奔波児鬪と云て鮎魚の妖精なり一個
 鬪波児奔と号て黒魚精なり我方聖竜王独の娘を持名を萬
 聖公主と云頗る花月の容見あり向年九頭駙馬を算とるは竜王
 喜び不堪に彼夫婦を慰んと世小掃する宝貝を需る如小此金光寺
 の仏舍利の夏を向出二年前の秋の頃爰ふまゝ塔の上ふ血を
 降し金塔を汚し終ふ仏舍利を奪ひ取又大羅天上ふ到り靈虚殿
 小忍び入王母娘々の九糸の靈芝岬を盗み公主小與へ宮中小深く
 隠し置ぬ此故小二品の宝貝の金光彩霞を及ち實ふ妙なる光景
 あり然る小近頃二獲とりの者在て西天小到り経を取んとは渠ホダ

徒弟小悟空とりめ者あり専ら人の悪道を正を授け邪を罰に
 と聞渠倘爰ふまゝの宝貝を穿捺する夏も有んら倘然夏有むを趁
 早ふ告知せよとて吾們兩個を遣ひいりり行者打多し彼孽
 畜向日牛魔王を呼で筵宴とつらつら這厨も又箇様の悪言を
 ろばや我件一ふ詮議をまじへ此時八戒三三人の和尚小燈燭を熾
 せ塔上ふ登りまゝ師父塔を掃ひ畢らば疾く歸り安歇白く爰ふ在
 て何を説話のめや行者向て能處へまゐりて彼宝貝を盗つるの
 方聖竜王のりよ〜當今此妖怪が自首ふ及びりりと首尾を説
 々を八戒向て妖怪を捉つるを那ぞ早く殺さるや行者曰く此時
 渠們を生しお死国王の前ふ引出し其照驗と做て後渠們を路隔
 とつと倫個を捉宝貝を把返さん八戒尤もろとろ行者と俱ふ個々

妖怪を搦捆とらふえ和尚おしやうと連つて三藏さんざうを助け塔たつを下くだして寺てら中ちゆうに歸かへるを
衆部しゆうぶの僧そう出で迎むかへて此この支しを問とて大おほい喜び勇ゆうまゝの行者ぎやう鉄索てつさくを
以もつて彼あつ妖怪やうかいを縛むすめ琵琶骨びわこつを穿うて再び變化へんぎするを免ゆるさば衆部しゆうぶ
の汝なんぢ命いのちを護まもらむ沙門しゃもん木妖怪もくやうかいを一室いつしつの裡うちに推おし菴あま藏ざうく保守ほしう
て夜明よあけふ及およぶ斯かて三藏さんざうの行者ぎやうを伴ともひ金光寺きんかうじを立たち出でて王城おうじやうに到いたり
黄門わうもん官くわんふ見みえ礼れいを正ただうとて曰いく我われの東土とうど大唐たいたうより西天さいてんに到いたり
經きやうを求もとむるの僧そうたるが今日こんにち大國たいこくにあり國君こくぎんふ見みえて関文くわんぶんを搦とら
支しを破やぶひ侍さむらひふ大人おとな宜よろく是こゝろを傳でん奏そうしる人ひと黄門わうもん官くわん斯かと國王こわうふ奏そう同どう
と國王こわう是こゝろを問とて三藏さんざう師し徒とを宜よろ入いれる人ひとを三藏さんざうの行者ぎやうと俱ともに階かゝ壇だん
ふ到いたり山呼さんこの禮らい終しまつるを國王こわう三藏さんざうを殿でん上じやうふ召めいして座ざを給たまふ三藏さんざう
を関文くわんぶんを捧たげしを國王こわう是こゝろを捧たげて誑せう終しまつる三藏さんざうを顧かへて曰いく你なんぢが夫おの

唐王たうわうより高僧かうそうを選えらぶ路ぢの途ちなるを厭いとはれ仙せんを拜かへ經きやうを求もとむ我われ
國くにの沙門しゃもんを専せんら盜道たうだうをなす國くにを煩わづけ君きみを廢たはれ三藏さんざう其その故ゆゑを問とは國くに
王わうの曰いく金光寺きんかうじの僧そう金塔きんたつの宝貝ほうがいを偷ぬす得とり以もつて未な諸國しよこく更またも本朝ほんてう
せは吾われ深ふかく是こゝろを恨うらむは三藏さんざう是こゝろを問とて曰いく階下かゝ誤ごて罪つとみ死しなせ
寺てらの僧そう們らを苦くる困こむる彼あつ宝貝ほうがいの乱石らんせき山碧さんせき波なみ潭たんの方かた聖せい龜き王わうが汝なんぢ
死しらるる昨夜さつや貧道びんだう塔たつ上じやうふ二個ふたごの妖怪やうかいを捉とら候まうる國王こわう驚おどいて其その故ゆゑ
を問とは三藏さんざう謹こんで首尾しゆゐの動靜どうじやうを仔細しじゆを語かたり人ひとを國王こわう王わう方かたに悟さと
ひ然しかるが今いまより武官ぶくわんふ命いのちを女精にょしやうを捉とらまはるるは三藏さんざうの曰いく
武官ぶくわんを用もちひるふ及および貧道びんだうが大徒たいと茅ちやう小孫せうそん悟ご空くうと云いふ者ものよく妖やう
鬼おにを伏ふし候まうる万般まんぱん他たふ命いのちを奪うばはるるは決かて過失か無なるべし國王こわう王わう方かたに其その
大徒たいと茅ちやう今いま那里どこに在あるや三藏さんざう行者ぎやうを呼よび人ひとを行者ぎやう進まち出でて國王こわう王わうふ

見ゆ國王行者が姿を見て見九体たゞと思ひ頓て彼妖怪を捉
 まるべきよと命も入行者領掌して階前を退死命先寺小到り八
 戒悟浄は命ごと妖怪を二個つ扯出させ二個打連て城中小到り二
 個の妖怪を階前小扣居々を國王首め文武の百官彼妖怪を
 見ふ一個の尖りところ此窟窟ころ牙凄利みく甲黒く是則ち黒魚
 の妖怪一つ一個を皮剥きして腹大きく口黒くして長長く是則ち
 鮫魚の妖怪一つ一つありて能歩行大体系人の形小変化る國王
 始終の正を訊く人を二個の妖怪仔細小是を自首すと國王頓て金
 光寺の僧を残りて残さむと然りて殿上小筵宴を設け二藏師
 とありて接待國王又謂て曰く何れの師徒をとりとも央と彼竜
 王を亡く宝貝を把返すと思ふる願くを師父是を免んや二藏



の曰く悟空と八戒兩個小命ト候ん行者八戒進と出て國王小向
 ひ吾們二個駢向ひ彼妖怪を亡く宝貝を把返すまらる國王曰
 く你们何程の人馬を用ひて妖怪を捉るや八戒が曰く那そ人馬を
 用る小到んや我酒を喫飯を食ひ師兄と俱小駢向を平の下小彼
 竜王を捉ふる國王大い小喜ひ嚮小捉二個の妖怪をして路間
 做せ多人を行者八戒亦ち雲小打兼て那里ともろく飛去る國王
 初め衆位の官人とも大い小驚死天小向ひく拜をさ二藏を先仏
 と唱へ悟浄を菩薩と称し口管恭敬かづつたる
 二僧蕩怪開竜宮
 昇聖除邪獲宝貝
 行者八戒の二人の乱石山碧波潭小到り彼二個の妖怪小謂て曰く你
 小先へ行く竜王小告ささふ我を是聖天大聖孫悟空あり金盃



新編西遊記 第六十四

寺の宝貝を拿返さん為小まじり趁早小返さを竜王の命を助る
 尚些小返ても遅るるを水中小打入て悉く塵小做べきるまで疾此由
 を竜王小告て宝貝を返せよ其代は小你們小よた餞別を取まへ
 と鉄棒を把出して口より仙氣を噴け一箇の戒刀とあり二女の耳
 と鼻を刺落し水中小投入多しを二箇の妖怪不思議小命を助る疾
 を忍びく宮中へ馳返り竜王の前小まり出大王大事あり大受あつと
 と呼小ける老竜王と九頭駙馬と筵宴を催し左々るが是を問て何
 更あるぞと訊るふ兩個の妖怪首尾を仔細語つと當今かの孫悟空
 金光寺の宝貝を拿返んとて嚴く吾們を攻呵責侍ふらうと告々せ
 を竜王一度孫悟空の二字を問より大に駭き戦々兢々騒ぎ々多しを
 九頭駙馬是を見て大に小笑ひ大に煩惱しゆる我幼き時より武藝

を學び四海の真象傑と交りて結ぶ那ど彼獨馬温を怕とや我今彼悟空
 を扼えまらべと一口の月牙鏢を把て水面小跳出大に小呼つと曰
 く彼獨馬温何れ小在や我金光寺の宝貝を盗らうとも汝が管する
 更小あはれ怎生吾小的小小抵付らうや越くまりて我手列を見よ但
 し你小吾威勢小怕とを腰が抜てまぬらうと大音小呷らとらる行者大
 の小脅とを登し汝宝貝を血で金光寺の僧們を苦困しむ我同
 汝門より那ど余死小見捨んや且又今の惡言聞捨ぐと死を知ぬ
 鐵子よと鉄棒を水車小回して打てかふる九頭駙馬も戟を振つと跳
 りと鬼と兩個乱石山の中小在て二十余合相戦め八戒釘鉈を打振て
 行者を助けて戦ひ々々九頭駙馬當ぐと穴中小飛昇りし本相と頭
 一々を九箇の頭有て其形の兇惡るるを見て八戒怕して逃人と

做を駙馬の妖怪翅を伸て飛係り八戒が徳を引扱え水中へ投入し
斯て妖怪原の女小変化して竜王の前小到り八戒を地上小投著
夫搦めよと呼りて衆部の小好的走り倚て八戒を細縛り
老竜王大のふ喜び駙馬どの功績々々と稱揚し酒を勧めて勞を
歇む此時行者の八戒少生擒とるを見て急小亦蟹と愛して水
裡小潜り入原来此処の牛魔王と戦ひ一時まりて路開けよく知こ
れを立地小宮裡小這登りて彼是と伺小死小許す小好的集りて
遊び居死あり行者近く這よりて向小駙馬大人の控まりのひし
の長き和尚の赤死とて在やと同々を小好的曰く志と死
む則ち廊下小在行者関て頓て廊下小這到り見むを八戒を控小
縛細らして在四方小人語らむを伺ひ終小縛細を咬断する八戒縛

を抜出て大小喜び師兄我釘鉈を這勵小取とるり志度して合手返さ
ん行者是を関て你一邊小隠れ少時待へ我穿捺て取まらん
て隱身の法を行ひ宮中小入て伺ひ見小彼方小釘鉈を立りけ置
り行者密小奪とり八戒を隠れ在處へ歸まり釘鉈を逃りたるを
八戒大のふ喜び師兄日水面小出て待り我彼女怪を偽引出さん
其時師兄彼を打殺せ行者點頭心得りて竟小水面小まり出て待
候ふ八戒を釘鉈を把て宮裡小跳り入桌椅傢伙の類ひ盡般打碎
く老竜王と九頭駙馬の急る小狼狽廻り何の差別なく唯逃
奔乱て騒動を八戒の手をも止めは四面八方小打て廻る恰も無人
境小入り若く竜王と駙馬の漸々小心を楚め手小手小利針を切
く衆部の水怪竜子竜孫を従へて八戒独を取囲む八戒よき程小

戦ひく時分を見合せ逃出る妖怪どもを遁さしと水面より追まらる
待設ける行者が鉄棒此頃由猶豫を跳しあつて老竜王が頭を打
た熟柿の若く小打破らば脳水滾々て死する九頭駟馬の勢ひ
の善らざる見取敢て戦はば竜王の死骸を収て水裡小帰る行者
八戒も又是を追む岸の一邊小座て少時歇し居る斯る如小
東の方より狂風滾々と登り南を指て行のあり行者頭を擧て伺
ひ見を二郎頭聖領梅山六兄弟と鷹を居たを牽雲霧小随ひ行玉
ふ悟空八戒小向ひ徐彼を看よ彼七聖兄弟より倅僂小當今央々
て我門ク力を助し人八戒聞て是然るべしと急小雲小舟乗中
追到り真君少時車馬を止め人我門兄弟爰小左て見へ奉り度幹
あり二郎真君是を聞て八戒と打連康張姚李郭直の六兄弟を引

卒して降りまゝて行者小見ゆ行者礼を行ひく首尾の動静を語り
万望の真君力を助め人二郎真君是を聞て我門今日獵小出く此処
を過り倅僂小を大聖兄弟小見え戦ひを助よと央るく惟喜那
そ是小過ん今より力を添て妖怪を退治せよ八戒が曰く我旦水
裡小討入て妖怪を偽引出し来んとて釘鉈を掣て又水裡小潜り入
宮裡小飛込くた竜波竜子竜孫小の竜王の死骸小取著敷き臥て
前後を覚に九頭駟馬一連小在て棺材を取納て爰小八戒が来るを
知は八戒忽ち竜子を捉て唯一突小突殺に竜波大の小駭は彼和尚
又まつて我子を殺せんと叫ひ々を九頭駟馬戦を合せて竜孫と俣
小ノ戒小打てかゝる八戒又戦ひ負て水面小逃出る妖怪どもハ遁さ
しと潭の邊より追うけ来る一連小隠れ在り二郎七星大聖と俣小

跳いで刀鎧を廻して電光の若く伐立くる小ぞ竜孫ハ五眸微塵
小切碎り立地小死ころころ九頭駒馬を見ても本相を頭九箇
の頭を伸て翅と設き飛廻る件一ふ喰ひ殺んと動きくる二郎真
君金弓小銀弾を挿え妖怪を虜ひ切て放てを過るは右の翅を射
串ころ妖怪翼を射破して山の半腹ふ落けるが忽ち又頭を伸て
三郎真君を喰んとする直君のたと鷹飛係つて是を啗碎く妖怪
増々大疵を負ふを今の力も弱果命一箇を助らんと去方き
に逃失する八戒是を追んと為る行者扯住り箭冠を追及るるに
と云ふと宝貝さ人取返さるを這廬を殺さふ及べくは我今謀計を
以て宝貝と拿返すまうと忽ち九頭駒馬が容と豪だ八戒を引領
水裡小潜し入宮中お馳入るるを万聖公主出迎て真の夫と申ひ吾

君恚生愧忙て帰てゆや行者曰く彼八戒今又爰ふ未るなり你早
く宝貝を拿来せ我深く藏置へ公主又の急なる小狼狽行者が
化るとも悟らば頃て一箇の金匣子を取り出は是のこは仏舍利の
又一箇の白玉匣を取り出は是の則ち靈芝草なり君よく收めこゑへ
行者二品の宝貝を受取本相を現し你吾を認得るやハ公主行者
を見て大小燈馬き奥へ逃れんとする処を八戒釘鉈を擧て跳し出唯
一打ふ討殺して行者の奥へ馳入る竜婆を生捉竟ふ二品の宝貝を
捧げ八戒と打連て水向小立返り二郎真君小見え水裡の動靜を
説く礼をのべ拜謝すとば真君も別れを告て淮江口小帰りのふ
行者と八戒ハ宝貝を携へ竜婆を撃立示賽国へ立返り国王の階
前小釣り此由を奏するを國王をどめ金光寺の僧輩も三藏師徒



終西遊記三卷之八

七星一箭
九頭竜亡

四個を拜し、権喜を度限りて、行者国王にお對ひ早く宝貝と塔の中
 納め、龍婆を塔上にお捉ぬれば、永く宝貝を保守めぬ。國王然るべし、權
 喜のひ文武の官人、詩妻徒へ三藏師徒四人を伴ひ、金光寺にお急ぎに
 此時行者悟浄を呼て、今より大羅天上にお到りて、王母娘々の宝貝
 九葉靈芝州を、天虛殿にお納め来るべし。命をば悟浄心得雲にお駕
 へ空中遙か去行たり、斯て國王と三藏師徒へ金光寺にお到り行者小
 命にて宝貝を納む行者命を受けて、仏舍利を捧げ塔にお登り、第十
 三層の上にお到りて、瓶の中にお是を納め、鉄索を以て竜婆を塔の中にお搦め
 看毘毘骨を穿て、逃るを許さず、真言を念て國の土地神を呼出
 亦本寺の伽藍神を呼て、你們三日一度づ、飲食を贈らば、此竜
 婆を養ふべし。列位の神命を受領、掌て退れたる行者、宝貝を安置

して塔頭を下りて、忽ち原に如く塔の頂上、赫然として霞光万
 道にお登り、瑞雲千條にお現る國王塔上を望んで、拜し、伸眉金光寺を改
 めて伏竜寺と号し、駕を還て宮裡にお還行ぬ。此時悟浄も靈芝草
 を、天虛殿にお納め、大羅天上より廻々として國王増々權喜にお塔は、大の
 進宮を聞て、三藏師徒を接待ぬ。斯く三藏へ早く西方にお進んぎ、
 三藏師徒一喜も受て、國王註方より四個にお衣帶鞋、議乾粮のこごひ
 を贈らば、三藏師徒厚く拜謝して、是を受別と告て、立出たるを
 文武の官人伏竜寺の僧輩、送々と二十里の道を送り、行竟り別して
 城中にお留り、入伏竜寺の僧達へ大恩を感て、別にお心け、又六十里を
 送り、行渡り流して、別して、三藏四個の者どもを祭賽國にお跡

西方小向ひて急がたり

油漬

繪本西遊記卷之四 早

東京 牛島町 二丁目
繪本所
油屋 清吉



